

「小児歯科と一般歯科の連携」



清水歯科医院(福岡市南区開業)

清水 浩

■ 略歴

- 1973年3月 九州大学歯学部卒業
- 同年4月 九州大学歯学部第1補綴学講座入局
同第2口腔解剖学講座を経て
- 1977年4月 現在地にて開業

1970年当時の我が国では、起床時に歯を磨く者約80%、1日に一度も磨かない者約20%、そして小児においては小学入学前に歯を磨かない者が約80%と、口腔衛生に対する関心が全般に低く、症状が出ればやっと受診するという状態だった。1977年に私が開業した当時は、国民皆保険制度が1961年に敷かれ、経済の右肩上がりの後押しもあって患者数は非常に多く、こと小児においては来院回数が少なくても治療をのぞいては、カリエス多発の小児に手が回らない状況にあった。先日発表された平成11年度歯科疾患実態調査では歯を毎日磨く者が96%、約6割以上が1日に2回以上磨くようになってきている。また、小児歯科が誕生して約30年が経過した現在、小児期の齲蝕有病者率は大幅に改善し、12歳児の場合71.9%で12年前より21%、6年前と比べても15.5%と減少してきている。ところが10代後半にかけての齲蝕有病者率が依然として増加していることが発表されている。

歯科医の充足率は現在急速に上がり、一医療機関当たりの患者数は減少し、少し古くなるが平成8年度調査では総外来患者数を勤務医も含む総歯科医師数で割ると16人、一歯科医院当たりで22人という状況になってきている。一見厳しいようだが、一日8時間労働とすれば1患者当たり歯科医師一人が30分時間をかけることが出来るとも考えられる。他の先進国においては、従来の集団を対象としたpublic healthから診療室レベルでの個人の予防というように診療体系がシフトしてきたが、日本においてもそれが可能な時代になったといえる。また、小児歯科は現在含まれていないものの九大歯学部附属病院は今年4月から総合診療部が発足し各専門分野を尊重した一口腔単位でのトータルケアを目指す方向に動き出している。

開業医はその役割において大学病院とは異なった面もあるが、方向として相互の連携をより緊密にしていくことがよりレベルの高い治療、ひいては患者からの信頼を得ることにつながると思われる。今回は「小児歯科と一般歯科との役割分担」について日常臨床から感じたことを述べてみたい。